2019.1.27

大草

読書メモ

103.服部正明・上山春平「仏教の思想４　認識と超越　<唯識>」角川書店（1970.4）

104.山折哲雄「髑髏となってもかまわない」新潮社（2012.5）

＜服部正明・上山春平「仏教の思想４　認識と超越　<唯識>」より＞

・唯識とは、心に映し出された表象をあらわす。ただ表象があるのみで、外界の存在物はないという思想である。（唯とは「ただ…のみ」という意味）

　注）表象とは、ことばや音楽などによって心につくりだされる心理的な形や姿。イメージ。

・それでは、表象とはどうしてあらわれるのか。これを「識の変化」という学説が説明してくれている。（後述）「識」とは認識機能で、「心」「意」が同義語。

・「識」とは、視・聴・嗅・味・触覚器官及び思考力を媒介とする六種の認識機能（六識）である。広義の「識」には「意」と「心」も含む。

・「意」は「識」に伴う自我意識（末那識）をあらわす。

・「心」は通常の認識機能の根底にある潜在意識（アーラヤ識：阿頼耶識）をあらわす。

・六種の認識機能（識）と自我意識（末那識）とは、潜在意識に対し「現勢的な識」といわれる。潜在意識が現勢化し、現勢的な識がその余力を潜在意識としてのこすことが「識の変化」である。認識の機能をただその現勢的なあり方においてのみとらえるのではなく、機能の根底に自我意識や潜在意識のあることを認めて、それらをも「識」とよぶところに唯識学派の識論の特色がある。「識」が自らの作用を知らしめる標識が表象である。

・原始仏教以来、人間存在は諸種の構成要素の集まりとみなされ、構成要素以外に恒常不変の自己（アートマン）があるという見解は否定されている。アビダルマ哲学者たちは、考察の範囲を人間存在を超えて人間のかかわる世界にまで及ぼし、究極的な存在要素を（１）物理的な存在（色）　（２）心　（３）心作用（心所）　（４）心に伴わぬもの（心不相応行）　（５）無制約的な物（無為）の五種に分類した。唯識体系においては、心すなわち識がこれらのすべての存在要素を統合すると考えられる。さまざまの知的・感情的・意志的な心作用は心を離れてあるものではない。心と心作用は同一の認識器官を媒介としておこり、同一の対象をもち、同一の時にはたらく。心はつねに諸種の心作用と連合しているのである。そして物質は存在も実は心のあらわれにほかならないとされる。

・世界は心の中に収められ、その心は生じた瞬間に滅して、次の瞬間の心と交替し、こうして生滅する心が一つの流を形成する。人間存在は「心の流れ」であり、心を離れて外界に存在すると一般に認められているものも、心が生み出した表象にすぎない。外界の物質的存在が心に映写されて表象が形成されるのではなく、心が自ら表象を生み出すのである。

・このような唯識思想は、大乗仏教における観念論の哲学と性格づけられるであろう。ところで、心を存在するすべてのものの根源とみなし、あらゆるものは心が生み出したものであると考える観念論的傾向は、唯識においてはじめてあらわれたものではなく、インド思想史上に古くたどることができる。

・古代インドのウパニシャッド哲学に同様の考え方があった。

ex.　叡知の塊としてのアートマン（自己）からこの世のあらゆるものが発生してくる。

（初めのところでメモの作成断念・・・難しすぎて・・・唯識3年俱舎８年とか）

＜髑髏となってもかまわない（山折哲雄）から＞

『病牀六尺』（正岡子規）より

「余は今まで禅宗のいはゆる悟りという事を誤解していた。悟りということは如何なる場合にも平気で死ぬことかと思っていたのは間違いで、悟りということは如何なる場合にも平気で生きることであった」

＜閑話休題＞

パルメニデス　「あるものはあり、ないものはない」　・・・　時空

ヘラクレイトス「万物は流転する」　・・・・・・・・・・・　時間

アナクシマンドロス「世界は無限定なものである」　・・・・　存在

アリストテレス「存在論」

仏教「色即是空　空即是色」

・北栄の山水画家　郭煕の画論『林泉高致』にある

「春山澹冶にして笑うが如く　　　たんや

　夏山蒼翠として滴るが如く　　　そうすい　したたる

　秋山明浄にして粧うが如く　　　めいじょう

　冬山惨淡として眠るが如し　　　さんたん

　　・漢字テスト　蟠る　　繙く

以上

メモ：てすとわだかまるてすとひもとくてすと